

# 本の運命

切替英雄

2010年12月23日

手書きとコンピュータ編集では勝負にならない。ドキュメント生産効率が違いすぎるのでね。19世紀イングラウンドで手縫いの内職をマシンに奪われた貧しい母さんや娘さんの絶望が偲ばれる。テキストを量産して雑本の山を築いている大学教授の友人がいるけれど、ご本人はモニターを見ながらキーボードをカタカタ打つのが気持ちよくなってしかたないんだらうな。一打一打が作品を紡ぐ。堪えられないのは分かるけどさ。確かに死んだお袋が使っていたシンガーの足踏み式マシンは滑らかで心地よかった。

コンピュータ編集は、比較を絶する効率の良さがあるけれど、改稿がたやすすぎて、いつまでも本文が確定しない。つまり決定稿が上がらない、という恨みがある。宮澤賢治のような締め切りのない推敲魔にはたまらないんだらうけど。が、ほんとうは、決定稿なんてないんだよ。中国人なんか何百年もかけて一つの物語をこねくり回すからね。それで原作者が誰かも分からなくなっちゃう。「水滸伝」の一番巻数が多い版が日本でしか伝わっていなかったりして。それを見て来日中の魯迅もびっくりしたそうだね。

赤インキの書き込みや抹消棒線だらけの賢治の原稿、木田金次郎が一旦売った絵の修正に客の家まで押しかけた逸話、前田青頓が「洞窟の頼朝」(重文)を直したくってしかたなかったが、美術館に入れられちゃって直せなかったもどかしさ。これらクリエイターの思いは尊いことだが、改訂は困難を伴うものだった。けれどテキスト生産に関する限り、今は余りに容易になった。しかも改稿の跡をとどめない。おまけにデジタル化された情報はコピー劣化しないから、改作したものが無数にばらまける。もう「原作」なんていうことも無意味になる。

生産効率がべらぼうに高いので、今では大部の、しかも誰の手が入ったのか分かりゃしない書籍がどしどし発行される。昔の本はもっとスマートでピュアだったな。品数もこんなに多くなかった。もうすでに人民は量産されるドキュメントに飽きているんでないかな。学生は本を読まなくなったしね。

ほとんどのドキュメントが冊子体の書物(コデックス)でなくて、ネットで配信され、スクリーンで読まれる時代になる。卷子本がコデックスに駆逐されたように、今度はコデックスが駆逐される。手稿本が印刷本に追放されたように、印刷本が電子本に追放される。コデックスは工芸品となってわずかに生き延びる。オレなんか装丁・製本家の柄折久美子の仕事なんて好きだから工芸品化は大歓迎だ。著者肉筆の影印を刷った紙をかがるっていうのが、製本屋の細々たる、しかし光輝ある未来か。荒稼ぎの出版社には今まで無線綴じの粗悪な本を量産してきた罰ぐらいに思っている。思えば岩波文庫が糸綴じをやめたのがオレの学生時代のことだったか。あれから手になじまない嫌な感じになった。開いたままの読み止しにさえできなくなった。あれが日本の名門書店なんだから情けないよ。おまけにブックデザインをカバーデザインだと勘違いしている装丁家がいる。オレなんか読むのに邪魔だから、帯やカバーは容赦なくはぎ取ってゴミ箱に捨てる。はぎ取ると無表情な表紙が現れ、悲しい気持ちになる。万事安上がり。素敵な表紙と背表紙と裏表紙が半透明のグラシン(古くはパラフィンと呼ばれた)にくるまれていて、糸でかがられていて、一字一字がいい香りのする紙面に深々と刻印されたように刷られていて、おまけに朱の著者検印まで捺してあった頃の本が懐かしいよ。ブックカバーな

んてなかったんだ。そもそも表紙こそ cover であって、ブックカバーって、jacket とか wrapper っていうんじゃないな。背表紙で思い出したけど、書名なんていうのも、今では背の幅いっぱいデカデカと厚かましく刷られているが、昔はもっと小さな活字で慎ましく上品に刷られていたものさ。それにしても文庫本にカバーだなんて。

出版社がなくても誰でも作品が発表できるようになる。ただし、すべてがサイバー空間の中の私家版になる。しかも原理的には誰もが原作者になりすまし改稿の手が入れられる。「文は人なり」の「人」がいなくなっちゃう。何世代もかけて物語を作ってきた中国人のあきれた気の長さには敬服するが、それが気の短い現代人にでもできるようになる。山のように異本（別本）ができる。本文批判なんか馬鹿らしくてやってられなくなる。だって原作者が賢治みたいな人なら、みずから際限なく改作していくからね。真贋<sup>しんがん</sup>の別がなくなり、決定本とか定本なんて言うのも愚かになる。文芸というものがすっかり変わりそうだね。

コピーライト（著作権）なんかじゃ食えなくなるよ。それは言語芸術の宿命だったのさ。言語作品は元来がデジタルだから。そもそも言語なんていうのは、二十数万年前から五万年前くらいの間に連続量的（アナログ）・未分節の自然界に人間が持ち込んだ離散的（デジタル）な記号体系だったんだよ。そして言語記号はいくらでもコピーが可能で、しかも劣化しない。文字のない時代は脳みそというハードディスクにそっくりコピーしたものだ。古代、パーニーニの文典のような著述が韻文でなされたのはそのなごりで、学徒は師の教えをまる暗記、つまり言葉どおりを脳に刻み込んでテキストの純正を保ったのさ。師の講義もノートの口述ではなく、脳髓に刻まれた韻文によるドキュメントの朗誦であったに違いない。詩（韻文）は暗記が容易だからね。オレだって子規以来の現代俳句二、三百句、啄木の歌百首ぐらいならたちどころに唱えられる。韻文は芸術（遊びごと）ではなく実用的な技術だったんだよ。釈尊も口頭でみ教えを垂れられたから、弟子（比丘）達は必死で暗記して次の世代に伝えたんだろうな。比丘が筆記用具を持っていたと思えないからね。弟子が聞いて理解したことをおのれの言葉で孫弟子に伝えたりでもしたら、釈尊の教えから遠く離れたことしか伝わらなかったろうね。だから仏典には釈尊の音声言語を讀める句（長広舌）があれば多く現れるのさ。釈尊は詩人だったのさ。大体イエス様だって文字が読めたか怪しいものだ。散逸した Q 資料が惜しまれるね。古代っていうのは、無文字社会が文字社会に移る時期のことで、要するに無文字時代、つまり音声言語の時代、すなわち叙事詩時代の最後の栄光が記憶に新らしかった有文字時代の初期のことなんだろうね。

そんなわけで詩人はいつの時代でも食えなかった。脳髓に複製品を作るのはフリーだから違法コピーにならない。詩は口伝で次から次へとコピーされていった。気に入らなければ作り替えて次に伝える。ネット時代と原理は同じ。これからは、言語芸術で稼ぐのはやっぱりあきらめるか、でなけりゃ、歌のライブや芝居や漫才のような語り、学者なら本じゃなくて、講義、講演。つまり一期一会の一発物だね。文字無き民へ先祖返りするだけさ。

この前居酒屋で札幌の出版社の社長 A さんに会ったおり、「Aさんのとこ、どう対応するんだい」と尋ねたら、たちまち不機嫌になられた。「紙で読むのが好きな人がいる限り、本はなくならないと思うわ。」とおっしゃるんだけど、そんな人、千に一人いるかいないかの時代がもうすぐやってくる。これはおもしろくない酒になりそうだなって、話はそれっきりにした。一介の文芸愛好家たるこのオレが千の一人に留まるかどうかは、元来無節操な人間だから今は断言できない。

北海学園大学『図書館だより』2011年春号

2013年8月27日改稿

2019年1月5日訂正